

## 緑爽会会報 No. 164

2019年10月25日発行

日本山岳会 緑爽会

発行人 富澤克禮



デザイン・制作 関塚貞亨

〜〜 《報告》 〜

### 10月山行報告「尾瀬、長蔵小屋に泊まる」

実施日：10月2日（水）～3日（木）

参加者：13名（写真参照）

「緑爽会のしおり」によれば、山小屋に泊まっての山行は見当たらない。ロッジ山旅に泊まって、翌日長沢さんに近くの山を案内していただく、といった形での山行はあるが。せっかく平野さんも会員でおられることであるし、一度長蔵小屋に泊まって散策というのも良いのではないかと思った。ただ水芭蕉の時期などは避けたい気持ちもある。そこで草紅葉の頃でどうかと考えて企画したものであった。もちろん燧ヶ岳や至仏山に登るわけではなく尾瀬沼周辺の散策である。



2日目出発前に

（左から）小泉義彦、荒井正人、渡邊貞信、渡部温子、福田光子、富澤克禮、平野紀子、

松本恒廣、田井具世、川口章子、島田稔、小林敏博、吉田理一

平野さんからは「必ず沼山峠から来ること」と条件を付けられていた。三平峠越えでは会の山行としては、ちょっときついと思っていたから、これは素直に受け入れることとして計画建てした。それでも帰路は峠を越えて大清水に出たいと思い、これを軸に、希望があれば沼山峠に戻ることも可とし、そのパーティーには別途リーダーを立てることとした。

浅草駅に8時半過ぎ全員がそろって、弁当など買い出しも済ませて「リバティ会津111号」に乗り込む。秋田から参加の福田さんも浅草から。吉田さんは奥只見湖から御池経由で合流予定である。「リバティ」は「Liberty」（自由）かと思ったら綴りが「Revaty」となっている。自由と多様性（variety）とを掛け合わせた造語だと知った。乗り換えなしで会津高原尾瀬口駅に昼過ぎに到着しバスに乗り換える。沼山峠で吉田さんが迎えてくれた。天気は午前中の快晴のままとはいかなかったが、雨の心配はなかった。ゆっくりでも1時間半ほどの行程であるが、膝に痛みのある小泉さんは写真を撮りつつマイペースで歩き、吉田さんが付いてくれた。尾瀬沼の見える展望台で一休み。小泉さんの到着を確認して先行させてもらう。

下って大江湿原に出ると草紅葉も良い雰囲気です。時々トリカブトやリンドウも姿を見せた。小沢田代に分岐には平野さんが迎えに来ていて、後続を待つというので先に進み、平野家のお墓参りをしていくこととした。長蔵小屋の前には新しいビジターセンターが建設中であった。

全員が揃っての夕食後、囲炉裏のある部屋で懇親タイム。吉田さんから越乃寒梅の差し入れをいただいた。皆さんからのおもたせもいつも通りでにぎやかな宴となった。やはり長蔵小屋は味があり、歴史を感じることができる。食事もおいしく、いろんなグッズも豊富だ。



囲炉裏のある部屋で

翌日、沼山峠に戻る4人には小林さんにリーダーとなってもらい浅草へと。小林さんは松本さんと渡部さん、お二人の元自然保護委員から貴重なお話が聞けたとのことだった。

ほかの8人は三平峠を越えて一ノ瀬に下り、バス・新幹線と乗り換えて帰途についた。木道が壊れている部分も多く、雨だと滑りやすく心配していたところであったが杞憂に終わった。

三平峠で一息入れていると、平野さんのご長男太郎さんが半ズボンにTシャツで登ってきたので一言二言言葉を交わす。下り始めてしばらく行くと木道の階段に歩荷さんが腰を下ろしている。大清水側からは珍しいなと思った。木々の紅葉にはまだ早かったが安全に下ることができてホッとした。一ノ瀬では長蔵小屋に60年勤めてまだ現職のスケさん（入沢祐明さん）がトラックで上がってきていた。群馬支部新入会の女性が一人で通り過ぎ平野さんと立ち話。いろいろな人に出会う。

大清水でバスを待つ間にパラッと雨が降ったが、天気も味方をしてくれた、との思いであった。（歩荷さんは、私が原の小屋で働いていた時によく荷物を届けてもらった方で、こんなところで会うなんて本当に奇遇だと思ったことであった。報告：荒井、写真撮影：小泉義彦）





二日目に4人で焼岳に登った。笠ヶ岳と抜戸岳が立派に見え、西穂高の向こうに少し傾いた槍の穂がみえた。明神の向こうは道も崩れて危ないといわれ、涸沢行きは諦めたが、晩年の茨木猪之吉は10月の涸沢から奥穂高に登っている。偉いものだ。

三日目に橋詰さんは残り、3人で釜トンネルを抜けて沢渡経由で帰ろうということになった。そのトンネルは八右衛門沢からのがけ崩れで、上部50cmほどの隙間を残して埋まっていた。いまさら徳本峠に引き返せない。匍匐前進で這っていこうということになり、100mばかり這ってようやく四つん這いから腰をかがめて歩けるようになったが、前川渡の手前で夜になり泊まることになった。物資不足の戦時下では上高地と違って粗末な不味い夕飯は当たり前のもので、いまさらながら兵役前の私のために精一杯のご馳走でもてなしてくれた藤原ていさんに感謝したことであつた。

兵隊生活一年余りの短い期間の最後は、船舶特攻隊となって鹿児島島の谷山に配属されたが、最初の入隊一週間後に列車に乗り、京都まで来たときに南方行きの船が沈んで無くなり比島行きが四国小松島行きに変更になるなど、何回も死を免れて奇跡のように94歳まで生きることが出来たのは何であつたのか。私は無神論者だが強運に恵まれた兵役以後の人生はまた次の機会に…。

※「稚魚が数匹泳いでいた」と書いたが、8月末にイワナの稚魚が泳いでいるわけではないので、戦後のゴールデン・ウィークかウエストーン祭の時の記憶と取り違えていたように思う。何しろ稚魚は可愛かつたので最初の上高地の時の記憶としたかつた願望だった。

・前163号「三人だけの尾瀬ヶ原」で「我々三人は靖子さんに和船で沼尻まで送ってもらい、」と記したが、これは記憶違いのようです。平野紀子さんから「靖子さんは船を漕げない。長英の妹のミヤ子ではないか」とのご指摘をいただきました。「長英さんの妹さんのミヤ子さんに」と訂正させていただきます。

## 「ナイロンザイル切断事件」あれこれ

近藤 緑

標題の事件は、長いこと日本山岳会を悩ませて来た。今もなお、その蔭を引き摺っているような気がする。古い話と言われそうだが、最近、鈴鹿の友人・湯浅美仁氏から『前穂高岳東壁遭難63年目の検証』という本が贈られて来て、半世紀以上にわたる著者の努力が、ようやく実を結んだ事に深い感慨を覚えた。

この事件は井上靖の出世作『氷壁』のモデルになったことで知られているが、もとよりあれは実話ではなく作家特有の錬金術によって小説化されている。しかし墜落事故を起こした当事者たちと親しく付き合う中から取材する事で本格的な山岳小説として不朽の名を留めている。

事件を起こした「岩稜会」は第二次大戦後間もない1946（昭和21）年に結成され、その名の通り岩壁の登攀を中心に活動していた。中心人物は三重県立神戸中学校（現・神戸高校）の物理教諭で山岳部長の石岡繁雄。2007年、この人の死後まもなく刊行された『氷壁・ナイロンザイル事件の真実』（相田武雄共著・あるむ刊）という本がある。それ迄、濡れて重たいマニラ麻のロープに苦労した山男達は、ナイロンザイルが世に出た事で大喜び。日本山岳会の「山日記」でもこれを推奨した。ところが事故は発生した。岩稜会の石原國利・澤田栄介と三重大学生・若山五朗か

らなるパーティの事故が起きたのは昭和30年1月2日。トップの石原がオーバーハングを登り切れずに若山と交代した途端、岩角に懸けてあったザイルが切れて宙吊りだった若山が墜落した。

この事件の後、石岡は自分の実験結果からナイロンザイルがエッジに弱いことを確認、更に母校・名古屋大学工学部の実験で確証を得た上で公表する。それに呼応してザイルの製造元東京製綱蒲郡工場で公開実験を行う。大阪大学教授・篠田軍治がその指導に当たった。この実験でナイロンザイルの「強度は麻の数倍」と出た事に疑念を持った石岡は、なおも自身の実験データを基に公開質問状で闘い続けた。

ナイロンザイルに世間の関心が集まっている中で、冷静に遭難の原因を追及しようとする人がいた。冒頭でふれた『前穂高岳東壁遭難—63年目の検証 ナイロンザイル事件の光と影』の著者・湯浅美仁氏。三重大学医学部出身、神戸で整形外科医院を営む医師である。少年時代から登山に親しみ、昭和34年に岩稜会に入会している。彼は、この遭難事件がザイル問題だけに絞られて、岩稜会としての総括がないことを問題視して、登山計画そのものから検証を始めた。この問題を相談しに夫人共々近藤信行の勝沼の仕事場にも訪ねてみえたこともあった。私も同席して、氏の並々ならない熱意に打たれたが、本の「あとがき」には、相談したが「上手くいかなかった」とある。夫としたら親友の石原國利の意向をヌキにしては、積極的には同調出来なかったかと思われる。

著書の中で、石原國利は湯浅氏に「いま表立って未解決の問題を曝しますとナイロンザイル事件が霞んでしまいますから」と言ったとある。

ここで石原國利と近藤との交流について話さねばならない。昭和30年代、当時「氷壁御殿」と呼ばれた世田谷区桜の井上靖邸では、大広間と書斎とをぶちぬいてマスコミ各社が集まる新年会が恒例になっていた。井上夫人はじめ女性陣総出のおせち料理を囲んで、飲み、かつ唄う無礼講だった。私ども夫婦は、まず夫の兄貴分だった杉森久英宅に年始に伺い、そこから連れ立って井上邸に向った。岩稜会からも石原國利さんらが参加していた。山本健吉NHK歌謡大賞選定委員長が、その年受賞した歌謡曲を巧みに唄われると、後は各社の文化部や文藝担当記者連が競って自慢の持ち歌を披露するのだった。この集まりが、後に毎秋、上高地を訪れ、涸沢迄登って「穂高の月」を眺める「かえる会」になった。実際に穂高に登るのは、石原國利さんを筆頭に若手ら数人で、近藤もその一人だった。読売の高野文化部長は退職後「山階鳥類研究所」に移られた位だから「かえる会」のまとめ役でもあった。石原・近藤そして澤田栄介・・・今、遺っているのは僅かしかない。

企業側のザイル実験を指導した篠田軍治は関西支部長であったため、その任を退くに当って支部名で名誉会員に推薦され、評議員会はこれを決議した。ただちに石岡繁雄・石原國利連名で篠田氏の「名誉会員撤回要望書」を提出するが、評議員会は取り消し不可能として再度決定する。

時の山岳会長は今西錦司氏。地元だけに石岡の意志のタダならないことを知っていた。今西会長から「お前、何とかしろ」と特命を受けた近藤は、神戸の石岡家を訪ねた。私も同行したので、民家に不似合いな鉄塔が高々と立っていたのを覚えている。ザイルの強度実験のための鉄塔だった。

石岡氏は学生時代に下宿した先の女の子が、ランドセルを背負って学校へ通う姿が可愛いと、その成長を待って結婚。しかも生家・若山家の長男だったにも関わらずムコ養子として石岡姓になったと聞いた時、女として私の思いは複雑だった。

話を戻そう。湯浅氏の著書は極力私見を避けて、関係者の証言を引用している。岩稜会側の山行計画を明らかにすることは、仲間内の落ち度を解明することになる。会としての総括を公表することには、岩稜会内部の意見も一つにはならなかった。石岡の死後、新たに見つかったのが、高井利恭会員の「奥又合宿備忘録」。以後、湯浅氏は高井との交友の中で多くの確証を得ている。

石岡を「バッカス」、副会長の伊藤経雄を「シャチョウ」（神戸のミニ百貨店の社長だった）。伊藤は墜落したまま行方の知れない若山の搜索で氷の下まで潜ったと聞く。そして石岡の腹心で石原國利の実兄である石原一郎が、事件当日のチーフリーダーだった。当初は石原國利と澤田栄介の二人の予定だった登攀に、急遽、若山五朗が加わって三人になったのは何故か。

そこに石岡から石原（兄）への働きかけがあった、というのがまず一点。長男でありながら、他家に養子に入った石岡が、三重大山岳部の弟に一花咲かせてやりたいと精鋭石原國利・澤田栄介の二人と共に登攀させるよう依頼した。二人と三人では登攀時間に差が生ずる。石原一郎は、弟國利に「昼までに第二テラスに着かないときは引き返すこと」と言った。だがトップの石原國利に遅れた二人が第二テラスに到着したのは午後2時50分。そのため頂上直下30メートル地点でビバーク。そして翌日、右側のチムニーに取り着いた石原がオーバーハング下で力尽き、若山に代わる。交替直後の僅かなスリップで、岩の突起に掛けていたナイロンザイルが切断して墜死したのだった。

確かに、チーフリーダーの言う通り、昼までに着かないときは撤退していれば事故は起きなかったかもしれない。しかし登攀よりも下降が、より困難な場合もあると思われる。

事故の後、岩稜会の活動は低迷した。「アルピニズムに沿った登山活動をすべきではないか」という石原國利の手紙に対し、石岡は「君だけが生き残っていい思いをするな」と書いて来たと言う。それを言われては返す言葉はなかったろう。その言葉は石原國利の心の重荷になったに違いない。

その後、福岡に戻って家業を継いだ石原國利さんは、実業の人として別人のようになった。その証拠に夫人の征子さんは婚約するに当たって兄から「石橋を叩いても、まだ渡らぬ男」と言われたと言う。また、身内が航空機事故で亡くなって以来、石原さんが利用するのは、もっぱら新幹線である。私が自然保護全国集会の帰り、川口章子委員と福岡近郊の石原家を訪ねた折にも、帰京する私に「地下鉄には乗るな」と空港迄のタクシーを手配して下さった。過去に地下鉄に海水が流れ込んで水死者が出たことがあったからだ。西南女学院出身のお嬢様育ちの征子夫人は、夫が名だたる登山家であることを知らなかった。友人から「『氷壁』のモデルは貴女のご主人でしょう」と言われても信じられなかったとか。その石原國利さんも年相応に脚が弱られたと聞く。それでも上高地から更に奥へと足を延ばされていた。若き日に起こした遭難の贖罪と慰霊の旅かと推察している。その帰りにわざわざ途中下車して、夫が入所している甲州市の介護施設を訪ねて下さったりした。

今年も石原さんからは秋を告げる「カボス」が送られて来た。石原夫妻は私共にとって懐かしい人である。また、近藤が倒れた後、入院した吉祥寺南病院の副院長は「検証」を上梓した湯浅美仁氏ご子息の筑波大ラグビー部での先輩だったという縁から、湯浅氏は上京の折には入院中の近藤を見舞い、何かと気を使って下さった。その湯浅夫人は東京生れ、戸山高校で深田久弥の長男・森太郎氏と同期だったとか。老いて人の縁は、大きな輪になって私の心の支えとなっている。

## 山川三千子著『女官—明治宮中出仕の記』

南川 金一

著者の山川三千子が、山岳会設立発起人の一人・山川（河田）黙夫人だと知っている人は少ないだろう。その名前は『山岳』に一か所だけ登場する。第61年（1966）に載った山川黙の追悼文の経歴欄に、「元子爵久世通章長女三千子（元明治天皇照憲皇太后女官、元権掌侍）と結婚」とある。

この号の編集者は望月さんで、相当に苦勞されたようだ。発起人であるから相応の扱いをしなければならない。発起人中、存命は武田久吉のみ。ところが会報が先に武田久吉に追悼文を依頼して掲載済みである。ほかに適任者は見当たらない。望月さんのことだから、武田久吉に手紙を書いて、『山岳』のために追悼文を書いて欲しいと依頼したに違いない。しかし、会報に書いた以上に書く材料はないと断られたようで、窮余の策で、会報に載った武田久吉の追悼文をそのまま『山岳』に載せた。その代わり、略歴や登山歴には力を入れたので、資料価値の高い追悼欄になった。子息に依頼して略歴を送ってもらい、それによって、夫人の経歴が初めて明らかになったのである。併せて、経歴中には「山川操（元権掌侍）の養子となり、…」とある。山川操の経歴についても、山岳会でそれを知っていた会員は、ごく少数だったと思われる。『山岳』の追悼欄は、単に故人の思い出だけではなく、山岳会史の資料となるものであるという好例である。

山岳会百年史の編纂作業中に、山川三千子著『女官』という本があることを知った。都立図書館へ行った折に検索すると、地下の閉架書架にあり、借り出したが、私の関心は山岳会史の参考になる情報があるかどうかだけだったので、斜めに目を通して1時間ほどで返却した。ところが1年ほど前、古本屋の棚にこの書名の文庫本があり、講談社から再版されていることを知った。早速に購入して、ゆっくりと読むうちに、戦前であれば発売禁止になるようなリアルな内容に驚いた。

この本によると、天皇の世話をする女官には2種類あって、その違いは、天皇のセックスの相手をするのと、しないのとである。前者の身分が典侍（てんじ）であり、後者の身分が掌侍（しょうじ）である。いくら天皇だからといって、そこは明確にしておかないと大混乱が生じるという管理上の配慮であろう。同書では具体的な名前まであげて女官の世界を説明しているところが凄い。典侍、掌侍、その他の女官が実名で登場する。三千子は皇后付きであったからその心配はなかったが、皇太子時代の天正天皇に惚れられて困惑し、代替わりを機に退出を決断した。血統を絶やしてはならないことが至上命令という異常な世界を見せつけられるが、その世界を外部に明らかにした人は彼女の前にも後にもいないだろう。

『女官』の初出は雑誌『婦人倶楽部』に連載された「女官日記」で、翌1960年実業の日本社から『女官』が出版され、2016年『女官—明治宮中出仕の記』が講談社学術文庫（写真）として再版された。

雑誌のインタビューという形にせよ、自分の体験を世間に発表するにあたり、それに応じるとすればどこまでを語るか、当然、夫である山川黙に相談したであろう。本書を読んだ印象では、夫は、心配せずに自由にやれと励ましたように感



じられる。山川黙の科学者らしい合理的な考え方をするパーソナリティーを窺い知ることができた。

書中では、河田黙の養母になる山川操のことが語られている。山川操は駐露特命全権公使柳原前光の妻・初子の世話役としてロシアへ行き、ロシアでフランス人からフランス語を学んだ。その能力を買われて、明治17年宮内庁御用掛となり、「御用の時だけ出勤」して年千円という高給で、「専門のデザイナーなどなかったので、フランスから送られてくるカタログによって皇后さまの洋服の形を考えて、裁縫所で作らせる」（『女官』から）のが仕事だった。明治33年権掌侍になり、同41年一高在学中だった河田黙を養子に迎えた。その嫁として、眼鏡にかなったのが久世道子だった。

山川黙は、三千子の女官としての働きとともに、母・操についても、ありのままの姿を書き残しておくべきだ、と考えたのではないかと思われる。山川家は会津藩家老の家柄で、戊辰戦争では辛酸を舐めたが、優秀な一族だったので弟の山川健次郎（米国に留学して後に東京帝国大総長）ともども明治の荒波を乗り越えた。この本では触れられていないが、山川操宅や山川健次郎宅には、困窮した旧会津藩士の子弟を書生として多数受け入れていたので、自身の生活はつましかったという。

私の関心はあくまでも日本山岳会史なのだが、それを追っているうちに、武田久吉からアーネスト・サトウに出会って幕末・明治史に引き込まれ、山川黙から戊辰戦争における会津や女官の世界にまで引き込まれるのだから、面白い。

## 山の文芸誌「アルプ」300号

吉田 理一

2018(平成30)年11月3日の地方紙「新潟日報」の朝刊コラム「日報抄」を読んで大変驚いた。山の文芸誌「アルプ」129号に載っている新潟県十日町市の滝沢正晴さんの「峠の日記」を取り上げていた。「日報抄」の記事によれば新潟県津南町生まれの滝沢さんは明治大学に進んだが「絵を描きたい」と武蔵野美大で学び直す。その頃から串田孫一氏と交流があったという。「峠の日記」掲載は1968(昭和43)年11月アルプ129号。50年を経てなお内容は古びないと紹介し、アルプが読み継がれる理由が分かると結んでいる。

雑誌「アルプ」の果たした役割や山の文化面における文学的価値などは今改めて私が緑爽会会報に紹介するまでもないほど高く評価されている事柄なので紹介は数値データのみに留める。

創刊は昭和33年3月、終刊は昭和58年2月の25年間にわたって刊行された、出版は創文社。

2019(平成31)年4月発行の緑爽会会員名簿記載の会員による寄稿は物故者を含めて4名である、退会者については正確な名簿を把握していないので割愛する。宮下啓三さんの146号(昭和45年4月号)に「春の旅はハイネを追って(画文)」が最初で宮下さんは34編寄稿されている。次いで152号(昭和45年10月号)には近藤信行さんが「文庫時代の小島烏水(一)」を執筆されている。近藤信行さんは小島烏水の研究を主として実に50編を寄稿されている。織内信彦さん1編、蜂谷(近藤)緑さん25編と続いている。

「アルプ」が刊行を終えてから36年の月日が流れたが、山岳書を扱う古書店で山積みされている古書の中に今も「アルプ」が散見される。



世の中にはマニアックな人もいるもので「アルプ」を一冊ずつ買い集め300号を揃えようとしている人がいると聞いたことがあるが、その目的を成就したという情報は今のところ聞いたことがない。日本山岳会の図書室に行けば何時でも全号閲覧出来るし必要な個所はコピーも出来るから、全号を蔵書として所持する必要は無いのである。しかし、山の本の世界に一歩足を踏み入れた人間にとっては、叶わぬ事かもしれないが頭の片隅にはアルプ全号を書斎に飾っておきたいという想いがあるのであろう。

OS・Windows 95の開発により一般家庭にもインターネットが普及されてから20年が経った。ネット上の「日本の古本屋」サイトには全国の古本屋の在庫がアップされていて、居ながらにして探求本が入手できる

ようになった。それ以前は上京の度に山岳書を扱う古書店巡りが楽しみであった。神田の悠久堂・阿佐ヶ谷の穂高書房・新小岩の小林書店・池袋の正林堂・名前は思い出せないが新丸子の駅近くの古書店・東大前の森井書店・駒込の中央堂書店、そして新潟市に出張の折にはよく寄った深田久弥直筆の額縁が飾ってあり越後支部初代支部長藤島玄さんの時代に永らく越後支部事務局が置かれていた学生書房。今となっては時代の流れとともに閉店してしまった店も多い。

何回も通ううちに顔なじみになった店主もいる。中央堂書店の小野敏之さんからは不定期にカタログ「ほんや」が送られてきた。注文しても先着順という事で稀覯本は殆ど外れであった。外れた中で今でも残念に思うのは日本山岳会創立発起人の一人である越後の豪農高頭仁兵衛編纂「日本山嶽志」(明治39年・博文館)の皇室献上本である。一体どのような装丁なのか是非一度お目にかかってみたいものである。

2012(平成24)年6月、忘れかけていた「ほんや」が数年ぶりに届いた。「アルプ300号全号揃」が出品されていた、ダメもとで深夜FAXを入れておいた。数日後大きな段ボールひと箱に300冊が送られてきた。全冊新品同様の美本である、よほどの愛書家の所蔵だったものと推察される。店主の小野敏之さんは故人になられたと昨年JAC会員からお聞きした、今となっては何方の蔵書だったのか確かめる由も無い。

2014(平成26)年2月25日JAC東京多摩支部主催の講演会「山口耀久氏・アルプとその時代」が立川市女性総合センターで開催された。原稿依頼者の選定基準・原稿料などのお話は編集担当者からでなければ聞けない貴重な講演内容であった。私は東京多摩支部の会員ではないが当日の担当役員のお一人長岡市出身0さんの計らいで会場を立川駅近くに移した懇親会に出席する機会を得た。アルプの創刊号から山の版画を寄稿されていた大谷一良さんにお目にかかることが出来写真に収めさせていただいた。大谷さんはその7か月後の9月21日に亡くなられた。私が大谷さんのお姿を拝見した最初で最後であった。



「アルプ」創刊号

## 「冠松、ウジ長、犀星」

夏原 寿一

ちょっと前になるが、所用で北陸方面に出向いた折、時間にゆとりがあったので金沢で途中下車した。特に目的があったわけでもないのに、まずは駅の案内所で市内の地図をもらってみた。金沢に来たから兼六園見物、ということでもなかろうと思いつつながら地図を見ていると犀川という川の名に目が留まった。

私の知っている犀川は、梓川と奈良井川の合流点から、安曇節で唄われた押野崎で「高瀬と巡り逢い」、川中島で千曲川と合流するまでの川である。金沢にも犀川があったのか、これは新発見だ、と川沿いに地図を見ていくと室生犀星詩碑とか室生犀星記念館などがある。

室生犀星の名は知っているが読んだ記憶はないし、どんな著作があるかも知らない。相方にそれを言うと「ふるさととは遠きにありて思ふもの」ぐらいは知ってるのではと言う。うん、確かに知ってはいる。ただ、それが犀星の作であることは知らなかった。と、話はそのレベルである！

さて、つい先日のことだが、わが緑爽会の重鎮・五十嶋一晃さんの名著『山案内人 宇治長次郎』を読んでいると次のような記述があった。

冠松次郎の紀行文や写真は、登山とは無縁な人々をもひきつけた。石川県金沢市生まれの詩人・室生犀星は冠松次郎の黒部の写真を見たり紀行文を読んでいたようだ。室生犀星は、冠松次郎とは一面識もなかったが、ユーモラスな「冠松次郎におくる詩」を冠松次郎に贈っている。

その冒頭に 劔岳、冠松、ウジ長、熊のアシアト、雪溪、前劔  
粉ダイヤと星、凍つた藍の山々、冠松、  
ヤホー、  
ヤホー、

という謳い方ではじまる詩は、このあと 19 行つづく。

冠松とウジ長、つまり冠松次郎と宇治長次郎を名コンビとして連記している詩歌であり、この発表がその後いろんな書籍に載ったことで、「冠松ウジ長」が登山者の間で普及するようになる。

しかし山に登ったことのない、黒部峡谷を知らないと思われる室生犀星が、このワードを並べただけで二人の間柄をよく表している。

室生犀星は、その後「冠松を讃へる」と題した詩を発表し、詩集「鐵集」を上梓する。この詩集の冒頭に「煤だらけの山」が収載されているが、黒部の廊下と冠松次郎を「ノッソリと立つ者」として謳っている。(中略)犀星はその研ぎ澄まされた構想力で黒部を謳ったのであろうか。文学者の想像力には感嘆する。

思わぬところに犀星の登場である。ここで、上記「冠松次郎におくる詩」の“あと 19 行”と、「ノッソリと立つ者」の全文を、本会図書室所蔵の『岳人冠松次郎：その生涯とアルピニズム』（北区飛鳥山博物館編）から紹介しよう。犀星の表現に、冠松次郎の豪放な人柄を思う。

### 「冠松次郎におくる詩」

廊下を下がる蜘蛛と人間、  
冠松は廊下のヒダで自分のシワを作った。  
冠松の皮膚に沁みる絶壁のシワ、  
冠松の手、手は巖を引っ掻く。  
冠松は考へてゐる電車の中、

黒部峡谷の廊下の壁、  
廊下は冠松の耳モトで言ふのだ、  
松よ 冠松よ、  
冠松は行く、  
黒部の上廊下、下廊下、奥廊下、  
鐵でつくったカンヂキをはいて、  
鐵できたへた友情をかついで、  
劔岳、立山、双六谷、黒部、  
あんな大きい奴を友だちにしてゐる冠松、  
あんな大きい奴がよつてたかつて言ふのだ、  
冠松くらゐおれを知つてゐる男はないといふのだ  
あんな巨大な奴の懷中で、  
粉ダイヤの星の下で、  
冠松は軒をかいて野營するのだ。

「ノッソリと立つ男」

山と山の廊下。  
黒部の黒ビンガの峽谿。  
ノッソリと立つ谷間の英雄。  
英雄だか何だか分からないが、  
至るところにノッソリと立ってゐる。  
或は臥てゐる底知れない奴。  
幾月千年の巖の廊下。  
頭が遠くなるくらゐ人間の思考力を挽ぎとる景色。  
そいつらが一纏めになって咆哮してゐる。

ついでながら余談をひとつ…、犀星のことを知らないなら知らないなりに、詩碑と記念館に行ってみようということになった。地図を見ると詩碑は犀川のほとりにあり、記念館はそこから少し離れた住宅地にある。駅から歩いて3kmほどの道のりだ。道中、公園のベンチで持参のクッキーをつまんだり、図書館のトイレを拝借したりの街歩きである。そうやって詩碑を訪ねたあと記念館の近くまで来たのだが、最後のところがよく分からない。そこで、犀川大橋という橋の南詰にある「谷屋」という和菓子屋さんに入って道を尋ねると、とても丁寧に教えてくださった。そして「これをお持ちなさい」と言って奥から出してきてくれたのは記念館の招待券で2名様可とある。ありがたいことだ。記念館を見学した帰りに再び立ち寄って和菓子を少々求め、しばしおしゃべりをしてきた。いい思い出が残った。



犀川のほとりで

～～《予告など》～～

11月山行は台風19号による日原街道の道路崩壊でバスが不通のため、下記のとおり変更いたします。

**11月15日(金) 奥多摩むかし道 雨天中止**

あまりアップダウンの無い歩きやすいコースです。東京多摩支部の石井秀典氏に案内して頂きます。紅葉真っ盛りの奥多摩を楽しみたいと思います。奥多摩駅から旧青梅街道をたどるコースです。

**集合：9：30 奥多摩駅前**

(立川発 8：11で、奥多摩駅着9：22がお勧めです。)

**行程：奥多摩BCに移動・ミーティング 10：00 出発→むかし道入口→羽黒様 10：10→槐木 10：35  
→不動の上滝 11：20→境集落 11：45→白鬚神社 12：00-12：30 (昼食) →惣岳集落 13：15  
→しだら吊り橋→板小屋集落 13：50→道所吊橋 14：20→西久保の折り返し 14：40→中山バス停 14：55 (奥多摩駅行きバス乗車)**

**\*帰路バス (奥多摩駅行き・中山バス停発時刻)**

(1) 14時14分、(2) 15時30分、(3) 16時19分

通常の日帰り山行の装備をお願いします。昼食は、各自ご持参ください。

担当：富澤克禮 (CL)、渡邊貞信 (SL)

申込：11月7日までに富澤までご連絡ください。



\*奥多摩BCでの前泊も可です。希望者は、富澤まで申し込んでください。

**12月忘年会：日時12月21日(土) 13時～集会室 会費1000円**

※当日は、山形の佐藤敦志会員より「鳥海山のイヌワシ保護の現状」についてお話いただきます。

※おもたせ歓迎です。お弁当の手配もあり参加申し込みは**12月14日までに**以下の連絡先までお願い致します。(連絡先) 渡邊貞信

**1月初詣山行：2020年1月10日(金)を予定しています**

**会費納入の件**：今年度も半年を経過しました。年会費<1500円>未納入の会員は下記の通りお振込みください。(今年度より**振り込みのみ**の取り扱いとなっています)

- ・ゆうちょ銀行からの振込 10000-18539041 「リョクソウカイ」
- ・他の金融機関からの振込 008-18539041 「リョクソウカイ」

--- **編集後記** -----

9月、10月と連続して台風が襲来し、大きな被害の爪痕を残していった。温暖化による海水温度の上昇が要因とのことだが、いよいよ他人事ではなくなった感がある。山も大きく変わっている可能性がある。私たちが日に日に快適な生活を手に入れることで、こうした環境破壊が進んでいると思うと、のんびんだらりとはしてられない。はたして今私たちに何ができるのだろうか。

<次号予告> 12月25日発行の主な内容

10月講演会報告、11月山行報告、その他投稿・寄稿など